呉梅村と画中九友歌

福本雅一

一

明末清初の詩人、梅村呉偉業（ばいそんごいぎょう）に有名な「画中九友歌」[1]がある。これはもちろん、杜甫の「飲中八仙歌」を意識して作られたものであるが、ただ後者が、当時の酒仙と称された人びとの奇行を描写したもので、杜甫が必ずしも親しく交わった者とは限らず、世間の伝聞によって作られた、と思われるのに対し、前者が九友と称することからすれば、交友関係を前提として作られた、と考えなければならない。取りあげられた人物は、九人と八人で同数ではないが、句数は「飲中八仙歌」を先に挙げれば、賀知章（二句）・李璡（三句）・李適之（三句）・崔宗之（三句）・蘇晋（二句）・李白（四句）・張旭（三句）・焦遂（二句）の凡そ二二句、先・仙通押の到底格であるのに対し、「画中九友歌」は次に見る如く、全三八句の尤韻到底格である。

華亭尚書天人流　華亭の尚書　天人の流

墨花五色風雲浮　墨花　五色　風雲浮かぶ
至尊含笑黄金投　至尊　笑を含みて　黄金投じ
殘膏剩馥雞林求　残膏　剰馥　雞林求む
太常妙蹟兼銀鉤　太常の妙蹟　銀鉤を兼ね
樂郊擁卷高堂秋　楽郊　巻を擁す　高堂の秋
眞宰欲訴窮雕搜　真宰　訴えんと欲す　雕搜を窮むるを
解衣盤礴堪忘憂　解衣盤礴　憂を忘るるに堪えたり
誰其匹者王廉州　誰か其れ匹（たぐ）いする者ぞ　王廉州
神姿玉樹三山頭　神姿　玉樹　三山の頭
擺落萬象烟霞收　万象を擺落して　烟霞収まる
尊彝斑剥探商周　尊彝　斑剥　商周を探り
得意換却千金裘　意を得れば　換却す　千金の裘
檀園著述誇前修　檀園の著述　前修に誇り
丹青餘事追營丘　丹青は余事　営丘を追う
平生書畫置兩舟　平生の書画　両舟に置き
湖山勝處供淹留　湖山の勝処　淹留に供す
阿龍北固持雙矛　阿龍　北固に　双矛を持し

披圖赤壁思曹劉　図を披き　赤壁　曹・劉を思う
酒醉灑墨横江樓　酒酔いて墨を灑ぎ　江楼に横にすれば
蒜山月落空悠悠　蒜山　月落ちて　空しく悠々
姑蘇太守今僧繇　姑蘇の太守　今僧繇
問事不省張兩眸　事を問うも省みず　両眸を張る
振筆忽起風颼颼　筆を振えば忽ち起こる　風颼々
連紙十丈神明遒　連紙十丈　神明遒なり
松圓詩老通清謳　松円詩老　清謳に通じ
墨莊自畫歸田游　墨莊に自から画く　帰田の游
一犂黄海鳴春鳩　一たび黄海を犂けば　春鳩鳴き
長笛倒騎烏牸牛　長笛　倒に騎す　烏牸牛
花龕巨幅千峯稠　花龕の巨幅　千峰稠なり
小景點出林塘幽　小景　点出す　林塘の幽
晚年筆力凌滄洲　晚年の筆力　滄洲を凌ぎ
幅巾鶴髮輕王侯　幅巾　鶴髮　王侯を軽んず
風流已矣吾瓜疇　風流已んぬる矣　吾が瓜疇
一生迂癖爲人尤　一生の迂癖　人の為に尤めらる
僮僕竊罵妻孥愁　僮僕　窃かに罵り　妻孥愁う
瘦如黄鵠間如鴎　瘦するは黄鵠の如く　間なるは鴎の如く
烟驅墨染何曾休　烟駆　墨染　何ぞ曾つて休せん

詩句の順に、董其昌（四句）・王時敏（四句）・王鑑（五句）・李流芳（四句）・楊文聰（四句）・張學曾（三句）・程嘉燧（四句）・卞文瑜（五句）・邵彌（五句）である。八仙と九友では一人増にすぎないが、全句数では一六句増の大差となり、当然、梅村は杜甫に比して、描写が詳密になっているが、これは詩句そのものの表現効果とは別である。『呉詩集覧』[2]は両者を較べて、

飲中八仙は各形容　極に到り、奇処は方に仙の字に於いて合と為す、九友歌は則ち平生の交游者を以って之を言う、故に必ずしも務めて奇矯を為さず、至尊含笑して黄金投ずの如きは、必ずしも天子呼び来るも船に上らずの奇に如かざる也、幅巾鶴髮王侯を軽んずは、必ずしも帽を脱し頂を露わす王公の前の奇に如かざる也、然れども和平に写し去り、奇情は自在、而して九友の為に神を伝えて写照す、

と評するが、これは唐から宋元明と時代が降ると共に、描写が精緻繁褥になる反面、詩想の風骨とでも言うべきものが、失なわれてゆくという、一般的な傾向を反映しているのかも知れない。沈徳潜[3]が九友歌に対し、

飲中八仙の歌格を用いて、而も絶だ其の面目を異にす、貴ぶ可き所以なり、

というのは、多分そのことも含めて指摘しているのであろう。

ところでこの九友であるが、次表の如く、その出身地或いは生活圏は蘇州近辺に限られ、その生卒はみな、梅村に比して著しく先行している。

呉偉業	梅村（一六〇九―七一）		太倉
一、董其昌	玄宰（一五五五―一六三六）	華亭	
二、王時敏	煙客（一五九二―一六八〇）	太倉	
三、王鑑	元照（一五九八―一六七七）	太倉	
四、李流芳	長衡（一五七五―一六二九）	歙県→嘉定	
五、楊文聰	龍友（一五九七―一六四五）	貴陽→華亭	

六、張学曾　爾唯（？　　）紹興→蘇州
七、程嘉燧　孟陽（一五六五―一六四三）休寧→嘉定
八、卞文瑜　潤甫（？　　）蘇州
九、邵彌　　僧彌（？　　）長洲（蘇州）

明末に空前の繁栄を遂げた江南で、最も富裕を誇ったのは蘇州・松江・常州の三府で、特に当時、経済と文化の中心であった蘇州をめぐる衛星都市は、金太倉・銀嘉定・銅崑山・紙蘇州と称され、多くの文人墨客が蝟集した。また東接する華亭には松江府が置かれ、その格式はやや劣るが、元末以来、常に蘇州に旺盛な対抗意識を抱き続けていた。九友が活躍した地域は、梅村の太倉を中心とすれば、すべて五〇キロの半径内に収まってしまう。その他の文化拠点としては、西に南京・揚州、南に嘉興・杭州・紹興等があったが、蘇松には到底及ぶべくもなく、それらが偏覇を唱えたのはむしろ清初、蘇松が奏銷案[4]に痛撃された以後のことである。

ところで明代の絵画は、国初はさておき、中頃からは蘇州中心の呉派と、浙江一帯の浙派との角逐によって展開するが、前者は沈周・唐寅・文徵明・仇英の、いわゆる明四大家が継起し、明末に華亭の莫是龍と董其昌が、南宗の優位を理論的に決定づけた時、戴進・呉偉より藍瑛に至る後者浙派は、完全に圧倒された。中には徐渭のような奇才もいたが、すべて「狂態邪学」として斥けられてしまったのである。

梅村がこの「画中九友歌」を作ったのも、そのことを考慮に入れれば、呉派の勝利宣言であり、その優越を具体例と共に誇ったもの、と言えなくもない。そして彼の次の世代には、四王呉惲の活躍によって、山水画のみならず、花鳥画においても、その様式は完全に時代を先導することになる。王時敏と王鑑は先に挙げた。あとの四人の出身地と生卒を次に掲げておく。

三、王翬　　石谷（一六三二―一七一七）常熟
四、王原祁　麓台（一六四二―一七一五）太倉
五、呉歴　　漁山（一六三二―一七一八）常熟
六、惲恪　　壽平（一六三三―九〇）　武進（常州）

これを見れば、太倉の西の常熟が華亭に代わる地位を占め、更に西に武進が加わったことになるが、それらはみな、蘇州の北に弧を描いて布列する都市であり、求心力は依然として蘇州に在ったことが分かる。

なお補足しておけば、九友中、最初この圏外にあった者は三名、李流芳と程嘉燧、そして楊文驄である。李と程は共に安徽出身、前者は歙県、後者は休寧で互いに隣接し、両者はそれぞれ、全国に展開する新安商人のネット・ワークを頼って、当時殷賑を極めた嘉定に寓居したものと思われる。時の知県謝三賓が、唐時升・婁堅にこの二人を加え、『嘉定四先生詩集』を合刻したことから、その名声は天下に伝わった。程嘉燧はまたここに在って、復古派につづく公安・竟陵を打倒して、文壇に君臨した銭謙益と親しく交わり、その推奨を受けたが、最晩に郷里に帰ったことは、詩中に歌われている通りである。

また楊文驄は西南の辺陬、貴陽の出身であるが、馬士英の妹婿となって南京に出、復社に加盟して、華亭知県となっていた。復社は婁東（太倉）の二張、即ち張溥と張采の唱導によって組織され、古学の復興を標榜する文学結社で、政治的には東林党の後継を自任し、

全国の俊秀を網羅し、しばしば大会を催して、その勢威を誇示した。張溥の入室の弟子であった梅村とは、このような縁で親しかったのである。詳しくは拙稿「楊文驄伝」[5]を参照されたい。

二

梅村は、この呉派の中心である太倉の出身であるが、詩に歌われた九友は、前表に見る如く、みな彼の先輩で、董其昌は五五歳、程嘉燧は四五歳、李流芳は三五歳、王時敏は一八歳で、その年齢差は父祖の間にあり、王鑑と楊文驄でさえ、およそ一〇歳以上の年長である。生卒を確定できない張学曾、卞文瑜・邵彌の三名については、流伝の作品の紀年によって、およその年代を推定してみよう。いまその作業に利用するのは、次の三種の年表A・B・Cである。

A　郭味蕖『宋元明清書画家年表』[6]

B　徐邦達『歴代流伝書画作品編年表』[7]

C　張慧剣『明清江蘇文人年表』[8]

流伝作品は、その上限と下限を確定すればよく、下限は恐らく歿年に接しているはずである。まず張学曾については、

A　五例

上限　崇禎六年（一六三三）癸酉、張学曾副貢（『甌鉢羅室書画過目考』）

下限　順治一三年（一六五六）丙申、張学曾在呉門西禅寺仿倪雲林山水図（故宮博物院蔵）

B　七例

上限　崇禎七年（一六三四）甲戌、山水軸（『夢園書画録』）

下限　順治一四年（一六五七）丁酉、詩画巻為南明作（『過雲楼書画記』）

C　無記載

次に卞文瑜。

A　一五例

上限　万暦三九年（一六一一）辛亥、卞文瑜作荷亭銷夏扇（故宮博物院蔵）

下限　康熙一〇年（一六七一）辛亥[9]、卞文瑜作湖荘清夏扇（故宮博物院蔵）

B　一六例

上限　万暦四四年（一六一六）丙辰、梅花書屋図軸（『古代書画過

挿図1　馬鞍山色図　董其昌

挿図2　山水図　李流芳

目考』）
下限　順治一一年（一六五四）甲午、蘇台十景冊（『石渠宝笈三編』）
C　四例
上限　天啓六年（一六二六）丙寅、長洲卞文瑜取白居易詩意作琵琶行図（『復初斎詩集』五八）
下限　順治七年（一六五〇）庚寅、太倉王時敏構西廬、延長洲卞文瑜為画壁（『過雲楼書画記』画六）
次に邵彌。
A　一〇例
上限　天啓六年（一六二六）丙寅、邵彌作蓮花大士図（故宮一三期）
下限　康熙元年（一六六二）壬寅、邵彌作墨梅図（「故宮名画梅集」第一集）
B　一三例
上限　天啓五年（一六二五）乙丑、仿古山水冊（『石渠宝笈続編』）
下限　崇禎一五年（一六四二）壬午、仿倪石竹図軸・秋声賦絹本図巻（『古代書画過目考』）
C　一〇例
上限　天啓七年（一六二七）丁卯、長洲邵彌至呉門、作水墨山水（『穰梨館過眼録』二九）
下限　崇禎一五年（一六四二）壬午、長洲邵彌死（『穰梨館過眼録』二九泉隠図跋、彌所著有『頤堂集』）

これらの表を整理すれば、三者の活躍時期と、歿年をほぼ知ることができるが、作品が遠く離れて孤立する場合、偽作の疑惑は濃厚となる。いま仮りにこれらに従えば、

張学曽（一六三三―五七）二四年間
卞文瑜（一六一一―五四）四三年間
邵彌　（一六二五―六二）三七年間

となり、それぞれに作品製作の期間が、当然のことながら、大きく異なってくる。中でも張はともかく、卞と邵にはいささか問題がある。

銭仲聯の『清詩紀事』[10]は全二二冊、四三〇〇〇字、巻帙浩瀚、考証縝密、博引傍捜、洵に大海への津筏と称すべき巨編であるが、その順治朝巻中に、この梅村の「画中九友歌」を録し、詩後に夏敬観「呉梅村画中九友考」を引いている。またこれは同じく銭仲聯『呉梅村詩補箋』[11]にも採られているが、全文かどうかは定かではない。まず邵彌について、その所論を要約すれば、

邵瓜疇の「貽鶴寄書図」が、龐莱臣の所にあるが、上に「蒼書詞兄、崇禎丁丑（一〇年・一六三七）六月」と題している。そして陸世廉が蒼書のために、「計るに僧彌の此を画くは、三十年に垂なんとす、而して僧彌の世を辞するは、亦た遂って年有り、壬寅（康熙元年・一六六二）長夏」と款している。また故宮に瓜疇の梅花図を蔵するが、「壬寅（万暦三〇年・一六〇二）」とある。もし六〇年後の壬寅とすれば、康熙元年となり、必ず誤りであろう。

と論じている。更に梅村にも「邵山人僧彌墓志」[12]があり、次のような哀話を録している。

僧彌の卒するは某年月を以ってす、……即ち其の年月、状を以って来りて銘を乞う、則ち其の長子豫也、余は其の請を諾し、且に十年ならんとす、乱に遭いて奔竄し、其の為る所の状を失う、

僧彌の亡後、家は益ます貧なりと聞くも、流離転徙して、之を訪求するも得ず、僧道開なる者有り、僧彌に従いて書画を受くる者也、今年の春、嘉禾（嘉興）に遇う、之を問えば曰く、豫は客授歩帰するに、過る所の河を渡りて風に遇い、船覆りて溺死す、僧彌に幼子有りて観と曰う、一足は行くに良からず、今は玄墓に出家すと、余は之を聞き、哭して声を失う、無何、道開も亦た死す、余は仲冬を以って戸に鍵して読書す、跛僧なる者有り、蹩躄して来りて曰く、吾れは邵山人僧彌の幼子観也と、其の貌を視れば良に是なり、坐して与に語るも、口嚅り涙噎び、詳なる能わず、十に猶お二三を得、

梅村が嘉興を訪れたのは、順治九年（一六五二）のことであり、文中に、墓志銘の依頼を受けて、十年になろうとする、と言うことを信ずれば、邵の死は崇禎一五年（一六四二）[13]以前となる。いま長ながと「墓志銘」を引いたのは、これら九友の中に、明清鼎革の喪乱に翻弄され、悲惨な末路を遂げた者の、少なくなかったことを、書きとめておきたいためである。彼は好学多芸で古器物を愛し、銭謙益の弟子で慷慨極論していたが、自分と遇った時には、「既に憊れ且つ衰えたり矣」と、梅村は歎じている。

挿図３　扇面　邵彌

次に卞文瑜に対して、夏敬観はおよそ次のように言う。

先の龐莱臣の所蔵に、文瑜の画三幀があり、その「山楼繍仏図」には、「丁丑（崇禎一〇年・一六三七）端陽」と款し、「仿巨然山水」には、「壬辰（順治九年・一六五二）秋日」と題し、他の一幅には「辛卯（順治八年）秋日」とある。これより見れば、彼が順治年間まで生存していたことは確実で、もし壬辰・辛卯を万暦のそれとすれば、彼は董其昌と同時代となり、梅村との接点も消えてしまう。

最後の張学曽であるが、彼は「九友歌」中に、「姑蘇太守」と歌われていることから、『呉県志』[14]によって、蘇州知府の在任が順治一二年（一六五五）と特定できる。従ってこの「九友歌」が、それ以後の作であると断じてよく、程穆衡がこの詩を、順治九・一〇年[15]に繋けることの誤りも、また明らかである。夏敬観は彼について、近頃の鑒蔵家は、梅村の画中九友の真跡を喜んで配合するが[16]、学曽の画を求めることは、最も困難である、と言っている。その画業は、前記の表によれば、崇禎六・七年の間より始まっているから、その活動は梅村にかなり先行し、また順治一二年に、蘇州知府に任ぜられたことを含めると、その年齢も梅村よりかなり長じていた、と考えなければならない。

以上の検討によって、画中九友のすべてが、梅村よりもみな年長であることが判明した。それでは彼らを何故、同輩のように九友と呼んだのであろうか。

三

呉梅村は明末清初を代表する詩人で、銭謙益・龔鼎孳と共に、江

左三大家と併称されている上、絵事にもまた精通し、「画も亦た大家為るに愧じず」[17]と評されているが、周亮工が[18]「多くは画を作らず」といい、また『桐陰論画』[19]が、「生平多くは画かず」と指摘するように、世に流伝する作品は、それほど多くはなかったと思われ、また文献記録からも、あまり情報は期待できない。いま先に挙げた郭味蘅『宋元明清書画家年表』（A）と、徐邦達『歴代流伝書画家作品編年表』（B）に、福開森『歴代著録画目』[20]（C）を加えて、これら三書から呉梅村の作品を抽出し、重複を避けた表を作れば、およそ次のようになる。年代順に並べてみよう。

1　崇禎四年（一六三一）辛未、仿呉仲圭秋江晩渡図（「晋唐五代宋元明清書画集」）A。
2　順治三年（一六四六）丙戌、為倦圃作設色山水巻緞本（『穰梨館過眼続録』）B。
3　順治七年（一六五〇）庚寅、為□翁壽水墨山水軸（『穰梨館過眼録』）B。呉偉業作山水図（「画中九友合璧冊」）A。
4　順治九年（一六五二）壬辰、南湖春雨図軸（『過雲楼書画記』五・一九、『呉越所見書画録』五・一〇四）B。
5　順治一一（一六五四）年甲午、呉偉業作山水扇（故宮博物院蔵）。
6　順治一二（一六五五）年乙未、為沂老壽山水軸（『麓台題画稿』二五）B。呉偉業作雲山泉樹図（『明清山水名画選』）。
7　順治一三（一六五六）年丙申、桃林図巻（『古代書画過目匯考』・「芸林月刊」六六期）B。松風万籟図軸綾本（『古代書画過目匯考附目』）B。
8　康熙五年（一六六六）丙午、呉偉業仿元人山水冊（『澄懐堂書画目録』）A・B。
9　康熙六年（一六六七）丁未、為舜工写山水軸（『虚斎名画録』）B。呉偉業在獅林精舎作山水図（「芸林旬間」六四）。
10　設色山水巻（『穰梨館過眼録』一四・一〇）C。
11　山水小幅（『夢園書画録』二〇・八）C。
12　山水通景屏（『古縁萃録』八・二）C。
13　雕橋荘巻（『退菴金石書画跋』一九・四）C。
14　墨山水立幀（『甌鉢羅室書画』一・六）C。
15　仿北苑雲山大幀（『甌鉢羅室書画』一・六）C。
16　山水冊（『三秋閣書画録』下・三）C。

これらの中で、1は明らかに偽蹟で、この時、梅村二三歳、榜眼の栄を以って進士に及第したばかりで、作画の暇があったとも思われない。また私は以前、彼の「河陽散牧図」[21]と題する立軸を見たが、これも紀年が合わず、それに違いない。このように落款の紀年による選別も、予備工作として必要である。またCの『歴代著録画目』は、引用書に当って、紀年の有無を確認すべきであるが、今回は時間に迫られて、ただ標題の列記にとどめざるを得なかった。最近これら文献資料の他に、

D　『中国古代書画目』[22]
E　『故宮書画図録』[23]

の二種が刊行された。共に図版を主とし、前者Dは現在中国各地にある博物館が所蔵する目録で、その総量は厖大であるが、整理がようやく終った段階で、真贋の吟味や優劣の評価は、これからの工作になる。これに反し後者Eは、戦前に厳選されたもので、かなり信頼がおける。いま前者中の上海博物館[24]に、呉偉業のa「南湖春雨図」・b「松風万籟図」・c「丹青宝筏図」（挿図4）の三軸を蔵するが、

aはもちろん4、bは7の2と同一のものである。aは梅村自身の作「鴛湖曲」[25]を録し、「右鴛湖曲壬辰三月下浣補此図、呉偉業」と款し、bは「丙申秋日画為□□老先生壽、弟呉偉業」と署し、cは「新霽後戯筆於梅花菴中、呉偉業」とある。そしてこの図の右上には、王鑑と署する八行の題があるが、文字が小さくて判読できない。

挿図4　丹青宝筏図　呉偉業　上海博物館蔵

また同じく前者中の南京博物院にも、呉偉業の詩画二幅を蔵し、dは「偉業画似思齢先生」と署し、上に「千嶂属断垣、老樹竟忘言、中有高人臥、秋声聞夜猿、梅村偉業題」と、自作の五絶を書き加えている。思齢は王綱を号で呼ぶ。順治九年（一六五二）進士で官は通政司左参議に至った。合肥の人であるから、龔鼎孳を通じて識ったのかも知れない。しかしこの五絶は『梅村集』に見ることはできない。eは単に「偉業画」と署し、同じく上に「秋色満寒汀、空山石気青、幾年倪処士、此地着茅亭、丙申九秋、偉業」と、同じく五絶を加えている（挿図5）。これら両幅共に、上半の詩と下半の画の接線は明白で、別紙であることは判然としている。下半の山水は筆致凝滞し、遠近濃淡の変化に乏しく、落款の文字も拙劣である。恐らく真蹟とすり換えられたものと思われる。これはよく見られるところで、作品の上下を切り離し、上半の真書に下半の偽画を加え、また逆に、下半の真画に上半の偽書を継ぎ足し、こうして真贋相い半ばする二本の作品が現れるわけである。

挿図5　書画　呉偉業
南京博物院蔵

以上を綜観すると、梅村の画業は明の滅亡後、順治初年の家居の時に始まった、という事実が浮上してくる。李自成が北京を破った時、彼は南京国子監司業であったが、馬士英や阮大鋮に擁せられた福王弘光帝の政権には、一月余りで挂冠し、故郷太倉へ帰っていた。翌順治二年に清軍が江南を平定したが、束の間の底定の後に突発した薙髪令[26]によって、江南のみならず、広く華中から華南にかけて大動乱が惹起した。梅村自身は全家を携えて蘇州東南の碧清湖に難を避けたが、太倉の西の江陰と、東接する嘉定、南接する崑山は、

町を挙げて清軍に抵抗し、ために惨害を蒙った。程なく幸い無事に家に帰ることができた梅村は、戦後の混乱になす術もなく、ただ日常の無聊を慰めるために、絵筆に親しむようになったのではないか。

梅村は自からの画歴については語らず、従って師承も明らかではないが、その「京江送遠図歌」[27]序において、

……偉業六七歳の時、吾が祖封詹事竹臺公（呉議）が蔵する所の数十紙を見る、今は大半散失するも、猶お存する者有り、此の巻は之を它袂に比するに、日月最も久しと為す、衰門凋替し、何人に落ちしかを知らず、乃ち劫灰の余、諸（これ）を某氏の質庫中に得たり、神物有りて擁護し、以って其の先徳を表章するが若し、綦（きわ）めて幸いならず乎

と述べることからすれば、彼が書香画塵の家に育ち、幼い時からその影響を受けていたことは明らかで、加えてその頃は、王時敏や王鑑の健在によって、太倉が呉派の中心であるという情況は、不動のものとなりつつあった。蘇州が前明の四大家の後は、傑出した作家に恵まれず、華亭が董其昌や陳継儒を失ってからは活気なく、嘉定・崑山も戦火に燬け、ただ太倉と西鄰の常熟のみが、画壇に覇を唱えることができたのである。因みに言えば、清初の六大家、即ち四王呉惲は、武進の惲恪を除いて、すべてこの両地の出身である。

この事実を反映するのか、梅村には題画詩が極めて多く、古詩のみに限っても、次の諸篇が数えられる。

1　題河渚図送胡彦遠南帰（巻二下・五古）
2　南生魯六真図歌（巻四下・七古）
3　題清風使節図（巻四下・七古）
4　画蘭曲（巻五上・七古）
5　題志衍所図山水（巻五上・七古）
6　題蘇門高士図贈孫徵君鍾元（巻五上・七古）
7　画中九友歌（巻六下・七古）
8　題崔青蚓洗象図（巻六下・七古）
9　西巘顧侍御招同沈山人友聖虎丘夜集作図絶勝因賦長句（巻七上・七古）
10　観王石谷山水図歌（巻七下・七古）
11　京江送遠図歌（巻七下・七古）
12　題劉伴阮凌烟閣図（巻七下・七古）
13　題江右非非子訪逍遙子図（巻九・詩後集一・五古）

首尾の二篇を除いてすべて七古であることは、描写の細密と興趣の深さに、無関係でないことを物語っている。

ところで前表に見る如く、梅村の画事は、恐らく順治三年の頃から始まっている。甲申三月の北京、翌乙酉五月の南京と、両年に亘る天墜土崩と、それに続く薙髪令の混乱も、丙戌に到ると次第に南へ移動して、江南には漸く平和が訪れたのではないか。もちろんさまざまな事件が継起したが、それらはごく特異な人物と、限定された場所での出来事で、梅村はこの間の無聊を慰めるため、絵事に親しむようになったのかも知れない。また言い換えれば、それは彼が自嘲する「草間偸活」の、一手段であったかも知れない。

少々の断絶があるが、梅村の作品が最も多く見られるのは、順治九―一三年間で、この時彼は四〇代後半である。順治一〇年の春、孫承澤・陳士遴・陳名夏の推薦によって、出仕を要請され、四月には南京に赴き、総督馬国柱に「辞薦揭」を提出したが、その秋九月、

倉皇として北京へ旅立つ。その間の経緯は、拙稿「呉梅村の佚詩二首」[28]を参看されたい。

馮其庸・葉君遠『呉梅村年譜』[29]によれば、順治一二年春、友人胡介が河渚に南還するに際し、「偉業は為に河渚図を画き、且つ詩を題し文を作りて、以って送る」とあり、また十二月七日には、「順治帝は偉業等に伝え、画を作り以って進めしむ、八日、偉業方に山水を点染す」という。在京の時、梅村は詩のみならず、画を求められることも多かった、と想像されるが、翌年冬、官を辞して故郷へ帰ってからは、何故か康熙五・六年に至るまで、一〇年の空白がある。擱筆の理由は明らかではないが、単に伝世の作品が、たまたま見られないだけなのであろうか。しかしこの期間の半ば、前述した奏銷案に牽連したのは、順治一八年であるから、この前後の数年は、恐らくその暇もなく、恐らく詩画に優游する気分にもなれなかったに違いない。

また康熙一〇年（一六七一）、六三歳の死に至る数年間に、その作品を見ないのは、恐らく彼が自身の著作の整理に没頭していたからである、と想像される。

四

これまでの数章にわたって、梅村は画事に精しく、また画技にも優れていたことを説いた。それでは彼の画は、後世どのように評価されたのであろうか。盛大士といえば詩画共に善くし、一九世紀前半に活躍した鎮洋（太倉）の挙人であるが、『谿山臥游録』の著者として知られている。彼はその巻頭に、「士大夫の画、画工に異なる所以の者は、全く気韻の間に在りて之を求むる而已」と喝破し、巻三画人伝の首に、

吾が州は向に画家の淵藪と推され、廉州太守（王鑑）、烟客奉常（王時敏）の後、之に継ぐに麓台司農（王原祁）を以ってし、海内の六法を論ずる者、必ず翕然として婁東（太倉）を称す、

と述べた後、梅村を巻首に据えて、

呉梅村先生の詩名は、海内に甲たり、画も亦た大家たるに愧じず、余は其の條幅扇冊の諸作を見るに、之を画中九友に擬すれば、当に思翁（董其昌）烟老（王時敏）の間に在るべし、李長衡（流芳）程松圓（嘉燧）は、尚お舎を避くる処有り、何ぞ況んや余子をや、

と絶讃しているが、これは過奨の辞で、殊更に婁東の卓越に附尾したのであろう。より具体的には、『桐陰論画』[31]が次のように評している。

呉梅村祭酒偉業は、筆意雅秀絶倫、作家の習気を脱尽す、生平は多くは画かざるも、然れども一たび落筆すれば、便ち巻軸の気有り、嫩処は金の如く、秀処は鉄の如く、真に逸品也、後の人、先生の画を見る者、自然に躁釈け矜平らかならん、

作家の習気というのは、職業画家の習熟の臭気のことであり、躁釈矜平は、騒がしく傲り昂ぶった気分も自然に沈静する、という意味である。

更に友人でもあった周亮工[32]も、「能く諸家の長を萃め、而して運ぶに己が意を以ってす、故に落筆は伝う可からざる者無し」と述べた後、三名の題を次のように録している。

孫宝仍題して曰く、吾が師の風流文彩、海内に照映す、其の秀

は廬岳の千尋の如く、其の遠は蜀江の万里の如く、此を閲して一往せば、顔色に侍するが如し、

毛卓人題す、婁江の秋雨、潺湲を聴き、東澗西田自から往還す、此の中の招隠　人の到る無く、叢桂　風生じ月は山に満つ、

楊大鶴題す、野橋の流水　樹は深々、独り雲峰を看　杖を曳いて尋ぬ、忽ち聴く上方より鐘磬の落つるを、空山何れの処か知音有らん、

毛の詩中の東澗・西田は、常熟の銭謙益と同郷の王時敏のことである。なお『国朝画識』等に、若干の記事があるが、殆んど顧慮するに足りない。ただ『清稗類鈔』[33]に見える話柄を引いておく。

梅村はかつて莆田の余懐澹心のために、山水立幀を作ったが、それは蕭疎澹遠の致を極めたもので、菩薩蛮詞一闋を題し、庚寅重九前五日と署していた。庚寅は順治七年に当るが、年号を記さないのは、陶淵明が甲子のみを書きつけたのに仿ったのである。この画は銭塘の徐印香舎人恩綬が蔵していたが、光緒の初め、張子虞観察預が、恩綬の先徳辛斎理問のために家伝を作った時、張預の手に入ったのである。

ここに指摘するように、梅村の画の落款には、清の年号が記されていない。故明を慕う気持ちを消極的に示したのである。余懐は当時の知名の士で、『板橋雑記』の著者として名高い。徐珂がこのような瑣事を採りあげてくれたことによって、梅村の画がいかに愛重されたかを、今なお知ることができるのである。

ところで私は、弊架に久しく梅村の画中九友歌冊を蔵していた。その一（A）は、「画中九友山水合璧」[34]と題し、梅村のそれを含めた一〇幀の山水立軸を集めた珂羅版精印で、その二（B）は「呉梅村画中九友画箑」[35]と題し、扇面のみで構成され、各扇の欄外に呉湖帆の題記をもつものである。湖帆は蘇州の人で、有名な呉大澂の文孫であり、荒れ狂う文化大革命の嵐の中で死んだ。

共に九友詩の登場順に作品を並べ、紀年・為書・題跋の有無を表記すれば、次頁のようになる。なお（A）には、葉末に「画中九友歌」を録し、「光緒三十四年（一九〇八）歳次戊申十二月既望、浭陽端方書」と款している。

A	九友	紀年	為書	題跋	B	紀年	為書
◎	呉偉業	庚寅（一六五〇）	翁老先生				
一	董其昌			道光己丑（一八二九）李廷鈺		丁未（一六〇七）	
二	王時敏	甲辰（一六六四）	玉符詞兄			壬辰（一六五二）	
三	王鑑	丙辰（一六七六）		王時敏		甲寅（一六七四）	
四	李流芳					庚申（一六二〇）	
五	楊文驄	戊寅（一六三八）				戊寅（一六三八）	晋昭□
六	張学曾	癸酉（一六三三）					
七	程嘉燧						
八	卞文瑜	癸巳（一六五三）				丁卯（一六二七）	服長詞丈
九	邵彌	庚午（一六三〇）				丙子（一六三六）	
	呉偉業				◎		

これを一瞥すれば、その製作年代の不明のものも多いが、最も早いのは、（B）董其昌扇面の丁未（一六〇七）で、これは梅村の生まれる二年前、また逆に晩いものは、（A）王鑑山水の丙辰（一六

七六　挿図6）で、梅村の死後五年の作である。このことから、これら九友画は、好事家が苦心して訪求し、或いは偽作もとり混ぜて構成したもの、であることが分かる。

呉湖帆は（B）の末尾に梅村の扇面を加え、次のようにいう。

梅邨は九友と交わるを獲たり、其の画は固より是の如し、但だ真迹の伝わること鮮なく、尤も九友の千百の一に及ばず、楊龍友・張尓唯は已に難し矣、呉祭酒（梅村）の尤も遇い難きを知らざる也、祭酒の真迹は、此の箑而外、余は固より深く信ずる者無く、千金も易えず、識者は自から九友を集めし冊、此を得て殿と為し、敢て以って自から豪とするを許さん、

湖帆はここで、楊文驄と張学曽の獲難いことを歎くが、前者は大阪市立美術館[36]に二本を蔵し、また若干がわが国に将来されている。後者こそ極めて稀で、その理由を夏敬観[37]は詳しく述べている。

私は四〇余年前、最初にこの「九友歌」の訳注を試みた時、梅村が九友というのは、彼がこれら九人に直接作品を乞うたことがあり、或いは何らかの縁由で、彼らの画を所持していることに因って、それを詩に作ったのである、というふうに理解していた。そしてそれ

挿図6　山水図　王鑑

と称する合冊などが、いつか現れるのではないか、と期待していた。いま挙げた二種が、或いはそれであるかも知れないが、画かれた絵に為書もなく、梅村との因縁を匂わせる片言隻語さえ認められぬ上、製作年代も、梅村の生前と死後に亘っている。

更に言えば、四王の一人で、梅村の同郷の親友、王時敏や王鑑の弟子でもあった、隣県常熟の石谷王翬に対し、梅村はしばしば言及し、「観王石谷山水図歌」[38]の七古の雄篇さえ作っているのに、彼が九友中に加えられていないのは何故か。ただ彼が後輩である、というだけの理由からなのか。

五

ここで最初の疑問に立ち戻ろう。梅村は何故、祖父から長兄の年代に当るこれら九人を、あたかも親友のように呼んだのであろうか。老大家が少壮の俊英を愛して忘年の交わりを結び、或いは小友などと称して、対等につき合ったという嘉話は、歴代に乏しくない例を見るが、梅村もこれら九人とすべて、このような交友関係にあったのであろうか。しかしその詩文に拠る限り、それを証明する記述は、殆んど認められない。同郷の王時敏でさえ、政治的立場を異にし、親しく交際するようになったのは、鼎革後のことである。

それでは九友というのは、酒友や詩友、或いは徳友や道友という時のように、年齢差を埒外においた呼称なのであろうか。しかしこれも「画中九友」という場合、もしある画派の先輩と後輩という関係であればともかく、そのような傾向も感知できない。これについて夏敬観[39]は、

……固より皆な梅村の前輩、称して画友と為すは、稍や標榜に近く、己れを揚ぐるの習いに似たり、

と、これら諸先輩を友人と呼ぶことによって、自己宣伝して目立とうとしたのである、と解している。しかしそれでは何故、このようなことをしたのか。『呉詩集覧』[40]はそれならば、当時盛名天下に震った陳継儒（一五五八―一六三九）に対して、

梅村の余山詩に、故人重ねて下拝すとは、是れ曾つて仲醇と友たる也、玄宰（董其昌）は仲醇と同じくす、而して詩中に仲醇に及ばざるは何ぞ与（や）、

と、梅村が仲醇陳継儒に拝謁したことがあるのに、どうしてそのことに言及しないのか、と詫（いぶか）る。継儒は早くに科挙を断念し、詩書画や著述に優游し、銭謙益によれば[41]、豆腐にまで眉公の名を冠する者があったという。梅村がこの関係を「九友歌」に利用しなかったのは、殆んど理解し難い、と靳栄藩はいうのである。

ところでつい最近、葉君遠は「呉梅村的一首重要佚詩」[42]と題する小論中に、次の新事実を発見したという。即ち梅村が董其昌の山水画（**挿図7**）巻末に、長篇の七言古詩を題し、次のように記すと、その文を引用している。

余は壬申（崇禎五年・一六三二）九月、虞山（常熟）に游ぶ、稼翁（瞿武耜）は東皐草堂に招飲し、歓を極めて罷む、已にして稼翁は牧斎（銭謙益）と同（とも）に、急徴を京師に被り、余は請室に郷労す、乃ち前歌を作りて、又た十余年、再び虞山に游ぶも、稼翁が道阻まれて帰らざるに値う、東皐を過ぐれば、則ち断垣流水、復た昔日の景物無し矣、乃ち後歌を作る、其の長公伯申兄は、董宗伯（其昌）の巻を出す、并せて其の上に書す、登高して遠きを望めば、雲山邈然、撫養して衰を省み、筆を擲って太息す、梅村呉偉業、

壬申といえば梅村二四歳、辛未の榜眼及第の翌年に当り、帰郷して郁氏を娶り、また前記、陳継儒に謁して、「呉駿公帰娶」[43]七律二首を贈られている。そしてその秋九月に、常熟の稼軒瞿式耜（一五九〇―一六五〇）の東皐草堂を訪れたのである。ここで梅村は稼軒を翁と呼んでいるが、彼は四三歳、道阻は婉辞で後に説く。

東皐草堂は鄰県常熟の北郭外にあり、その父瞿汝説が築いたものであるが、その時に作ったのが、ここに記された「東皐草堂歌」である。しかし梅村が晩年、自から編定した詩集には、何故かこの詩を刪去してしまった。葉君遠はそれをこの画巻に見出して狂喜し、「一首重要佚詩」と言ったのである。

この瞿式耜について『梅村詩話』[44]は、

……後数年、余は再び東皐に至る、則ち稼軒は義を粤西に唱え、其の子伯升（瞿嵩錫）は、門戸是れ懼る、故山別墅、皆な荒蕪して斥売せられ、復た向日の観無し、余は為に後東皐草堂歌を作るは、蓋し之を傷む也、又た二年、稼軒は相国を以って桂林に留守す、城陥り、屈せずして張別山（同敞、張居正の曾孫）と倶に死す、

と述べているが、梅村が何故、董其昌の「山水図巻」に、およそ其昌とも、画の内容とも全く係らない二首の詩[45]を書きつけ、更に先に引用した跋文を加えたのであろうか。ただ瞿嵩錫に強要されただけなのであろうか。この図巻は偽作の可能性も排除できないが、葉君遠は理由を挙げて、それを否定しているし、詩も純然たる梅村調で、これを作るのは容易ではない、と思われる。

挿図７　書画合璧　董其昌・呉偉業　上海博物館蔵

董其昌が死んだのは崇禎九年（一六三六）で、梅村は二八歳であったが、両者は恐らく相い見える機会はなかったであろう。しかし上述したような経緯によって、梅村が華亭の尚書を九友の首に据えたとすれば、直接の係りがなくとも、画事において何らかの因縁があれば、彼を九友の中に加えたのではないか。特に年齢の隔たる程嘉燧と李流芳に対しては、この疑いが濃厚といえよう。

「九友歌」で董其昌に次いで挙げられるのは、同郷太倉の先輩王時敏である。梅村は彼について、「余の生まるる也晩く……時に奉常に就いて、以って吾が及ばざる所を訪う」というのは、或いは画事についてかも知れない。この「王奉常煙客七十序」[46]はまた、時敏の呉派における地位と、その作品について、次のように活写している。

雲間の董宗伯玄宰、陳徵君眉公（継儒）は、相国（祖父王錫爵）の高弟にして、編修公（父王衡）の執友也、輩行を折して与に游ぶ、先朝、画を論じ、元の四大家を取りて宗と為し、石田山人（沈周）繇り後、宗伯は為に其の成を集め、奉常は略ぼ与に相い亜ぐ、其の捜羅鑒別に当り、一秘軸を得れば、閣を閉して凝思し、瞪目して語らず、遇いて賞会有れば、則ち牀を遶りて狂叫し、掌を拊ちて跳躍す、黄子久（公望）の作る所に於いて、早歳遂に閫奥を窮め、晩に更に諸家の長を蓄萃し、陶冶して之を出す、解衣盤礴、格高く神王に、古人を筆墨の畦径の外に力追し、識者は其の必ず伝わらんことを知り、玄宰は書を署して古今第一と為す、

ところで前述の如く、梅村は復社の盟主張溥の入室の弟子であったため、明の滅亡前の太倉においては、全く立場を異にしていた。[47]時敏の祖父王錫爵は東林党とは相い容れず、それに属する過激な言官たちを、「禽鳥の音」[48]と冷笑していた。東林を継ぐと自負する復社とは、むしろ対立していたと言ってもよいだろう。更に時敏は、崇禎前半の国政を壟断した烏程の温体仁と姻戚であった。体仁はその反動体質と反東林の行跡によって、『明史』では姦臣伝に入れられている。

しかし明清鼎革に際し、梅村は積極的な抵抗を試みることなく、投降路線をたどり、郷党に推された時敏もまた、太倉を挙げて清の軍門に降った。こうしてそれまでの反目は忽ち氷解し、新しい支配を受け入れることになった両者は、急速に接近していった。北京に

挿図８　詩画巻　王時敏・呉偉業　藤井有鄰館蔵

続いて南京が亡んだ乙酉（順治二年・一六四五）には、梅村は早くも時敏のために、「跋王文粛公（錫爵）闇牘」[49]を執筆している。

そしてその九年後の三月十九日には、「明の遺民、私かに崇禎帝を太倉の鐘楼に祭る、偉業は二律を賦し、以って迎神・送神の曲に当つ」という、まことに驚くべき事実が、『年譜』[50]に記されている。三月十九日といえば、北京が李自成の手に陥ち、崇禎帝が煤山で縊れて、社稷の滅亡に殉じた紀念すべき日である。

いま京都の藤井有鄰館[51]に、時敏と梅村の合作巻を蔵し、そこに時敏は「聚石図」を画き、梅村はその後に「新蒲緑」と題する、七律二首を書きつけている（挿図８）。この内容は非常に重要な意味をもつが、ここにそれを説く余裕はない。拙稿「呉梅村佚詩二首」[52]を参照されたい。これに見られるのは、時敏の画に梅村が詩を題したという事実であるが、これはその一例にすぎず、他にもまた同様の詩画が発見されるかも知れない。同郷でほぼ同期という関係から、その可能性は極めて高いが、先の董其昌の例を想起すれば、長輩の画に梅村が詩を題したという事実が、再び確認されたことになる。梅村が敢て「友」と呼んだのは、このことを指しているのではないだろうか。

それでは第三の王鑑については、どうであろうか。『故宮書画図録』十[53]に、その「倣趙孟頫茂林蕭寺図軸」が見えるが、落款に「戊戌春三月　湘碧鑑」とある（挿図９）。戊戌は順治一五年（一六五八）に当り、時に梅村は五〇歳、前年の春、北京を辞して太倉に帰った頃である。また王鑑は六一歳、八〇年の画業も、漸く老熟の境に入っていた。詩塘に梅村はまず、

曉雨　溪山　緑蕪漲り
碧瀾堂畔　遠峰孤なり
誰か秀邸王孫の筆を将（も）って
改めて作る　廉州刺史の図

という七絶を題し、続けて次のようにいう。

趙承旨（孟頫）は京師に於いて、鮮于（樞）諸公と同に万柳荘に高会す、賈人は千金を携えて之に随い、渲染する所に随いて易え去る、今其の地の遺址尚お存す、余は大都（ベキン）に在り、尚お其の事を談ずる者有り、照老の此の幅、真に真を乱るに足る、得る者宜しく珍重し、名香宝鼎を以って供養を作すべき也、弟呉偉業、真想斎に題す、

挿図９　倣趙孟頫茂林蕭寺図　王鑑
国立故宮博物院蔵

ここにも、長輩の画に詩を題するという例が見られる。王鑑も王時敏同様、太倉の名士で、『詩集』巻九上には、「再送王元照」五律一首、同巻一七下にも、「送王元照還山」七絶八首が見られ、梅村との交友が密であったことが知られる。

このように検討してくると、「画中九友歌」中の九友はみな、梅村のかなりの年長であって、彼ら九人の画に、梅村が直接に詩を題した、という共通項が存在するのではないか。最初の三人については証拠を挙げたが、残りの六人についても、必ずこのことがあるに違いない、と想像される。

王翬石谷といえば、四王の一人に数えられ、王時敏・王鑑を通じて、梅村は彼と熟知で、『詩集』巻一八下と、『文集』巻一三に、「題王石谷画」七絶二首、「王石谷贈行詩序」を見る。しかし梅村が彼を九友中に入れなかったのは、はるか後輩という理由からではなかったのか。

六

近人黄賓虹に「清代画学之盛」[54]と題する短文があり、

呉梅村祭酒の画中九友歌を作りて自り、千古の芸林、伝えて佳話と為す、乾嘉承平の際、風雅鼎盛、士大夫は文酒の暇に、多く画理を嫻習す、法時帆祭酒式善、嘗つて十六画人歌を作る、

と述べ、朱鶴年野雲・湯貽汾雨生以下一六人の名字を列挙する。また済南の朱青雷文霍にも「画中十哲歌」があるとして、全二八句に及ぶ七言古詩を引用し、その自跋を載せている。

右は余が庚申の歳に、梅村先生に效いて作る所の画中十哲歌也、或いは諦交已に久しく、或いは私淑せる諸人にして、意の属する所、率爾に篇を成す、次序既に已り、軒輊に心無く、敢て定論と云う、後の覧省、此の裏を鑒む有らんことを望む、詩は固より論ずるに足らざる也、

覧省は或いは覧者の誤りであろうか。最後にこれ以外、次の二首を加えておく。

續畫中九友歌[55]　趙彦修

剡溪侍郎荊關流　淋漓墨障煙雲浮　放筆天外烏紗投
西溪高隠夫何求　雷州鑒賞珊瑚鈎　游心藝苑春又秋
上官白簡窮鏡鎪　金貂換酒百不憂　髯翁三十游皇州
宣南畫史居上頭　驅染子墨萬象收　冷齋低首歳幾周
未寒先補山羊裘　松圓後起追前修　蔬篁古木摹丹邱
一僮一鶴隨扁舟　虞山茂苑長句留　秋言大筆如戈矛

蒼松巨壑師馬劉　酒人八九來深樓　傳觴作畫心悠悠
誼亭細楷如鍾繇　酒酣捉筆揩雙眸　煙霞落紙松風颼
元氣灝灝精神遒　叔明汪子工吟謳　收拾煙墨賦宦遊
勸耕原隰聞啼鳩　長宮穩跨折角牛　鴛湖下筆煙景稠
花鳥更比林良幽　輦金索畫來瀛洲　脱巾笑傲東諸侯
阿弟生計無田疇　迂疎隱僻動見尤　撫印作畫驅窮愁
浮家江上閒於鷗　放頭爛醉萬慮休

呉梅村山水畫幅歌　薛紹徽『黛韵樓詩集』巻二

昔讀梅村詩　已識當年體　今日見畫圖　平原樹若薺
王楊盧駱粲時花　董巨荊關酿芳醴　墨汁淋漓落筆端
一掬風煙淚未乾　王維畫有滄桑感　庾信文宜蕭瑟看
吟情皴法遙相續　水剩山殘人不俗　婉轉如聽賽賽琴
蒼茫來寫圓圓曲　承旨愧爲趙孟頫　託根非若鄭思肖
通靈人妙只自知　噴鼻炙眉更誰弔　高名畢竟終難没
泉勢峰容尚奇崛　拙政園荒冷菊松　礬清湖闊無薇蕨

〈注〉

1　『梅村詩集』巻六下。なおこの詩に関しては、拙訳注が『呉偉業』（『中国詩人選集』二集12、岩波書店、一九六二・六）に収められる。
2　靳栄藩注『呉詩集覧』巻六下。
3　沈徳潜『国朝詩別裁集』巻一・呉偉業。
4　順治一八年（一六六一）、清朝は江南の官紳を弾圧するため、税の滞納を口実に、呉偉業・葉方靄・徐乾学・徐元文・韓菼・汪琬等の諸名士を、一網打尽にした事件。孟森『心史叢刊』一集「奏銷案」参照。
5　楊文驄については、拙稿「楊文驄伝」（同朋舎『明末清初』所収）参照。
6　（中国古典芸術出版、一九五八・一一→北京人民美術出版、一九六二・九）
7　（上海人民美術出版、一九六三・一〇）
8　（上海古籍出版、一九八六、一二）
9　この辛亥は万暦三九年の誤り。そうすれば下限はBの順治一一年となろう。
10　銭仲聯『清詩紀事』（江蘇古籍出版、一九八七・二）。
11　銭仲聯『呉梅村詩補箋』（『夢苕盦専著二種』之一、中国社会科学出版、一九八四・四）。
12　『梅村文集』巻二四。
13　いま上海博物館には邵彌の作品九点を蔵し、それらは崇禎元年（一六二八）に始まり、同一三年（一六四〇）に終る。また蘇州博物館の二点は、いずれも崇禎一〇年（一六三七）の作。
14　民国『呉県志』巻七・職官表に、「学曽は正月始めて蘇州知府に任じ、十二月即ち劾を被りて離任す」という。
15　程穆衡『呉梅村詩箋注』「画中九友歌」巻五（起壬辰、尽癸巳秋、未赴召以前）。
16　本稿第四章参照。
17　盛大士『谿山臥游録』巻三、呉梅村。
18　周亮工『読画録』巻一。
19　秦祖詠『桐陰論画』巻一。
20　福開森（J.C.Fergason）『歴代著録画目』（台湾中華書局、一九六八・一一）。
21　弊架に蔵するはずであるが、未検出。
22　中国古代書画鑑定組編『中国古代書画目』1～23（文物出版、一九八六・一〇―二〇〇〇・八）。
23　国立故宮博物院編輯委員会編『故宮書画図録』1～21（故宮博物院刊、一九八九・八―二〇〇二・一二）。
24　注22に同じ。

25 『梅村詩集』巻五上。拙訳注が前記『呉偉業』に収められる。
26 拙稿「薙髪余聞」（『明末清初』同朋舎、一九八七・二）参照。
27 『梅村詩集』巻七下。
28 『明末清初』二集（同朋舎、一九九三・五）。
29 『呉梅村年譜』（江蘇古籍出版、一九九〇・五）。
30 『文集』巻三五「与子暻疏」に、「奏銷は吾が素願に適す、独り在籍を以って、部提牽累せられ、幾んど家を破るに至る」という。
31 注19参照。
32 注18参照。
33 徐珂『清稗類鈔』巻七一芸術類、呉梅村画山水。
34 「画中九友山水合璧」（宝華庵収蔵、上海有正書局、一九二三・七）。
35 「呉梅村画中九友画箑」（精印歴代書画珍品第一集第十八種、台湾商務印書館、一九七四・七）。
36 大阪市立美術館所蔵「秋林遠岫図」「林泉清集図冊」。
37 注10・11参照。
38 『詩集』巻七下の他、同巻一八下「題王石谷画」七絶二首、『文集』巻一三「王石谷贈行詩序」がある。
39 注10・11参照。
40 『詩集』巻六下、靳栄藩後語。
41 銭謙益『列朝詩集』丁集小伝。
42 葉君遠『清代詩壇第一家・呉梅村研究』（北京中華書局、二〇〇二・一一）。
43 陳継儒『陳眉公先生全集』巻三一「呉駿公帰娶」二首。未検。いま『呉詩集覧』談藪上参照。
44 『文集』巻五八。
45 「後東皐草堂歌」は『詩集』巻四下に収め、拙訳注が『近世詩集』（『中国文明選』朝日新聞社、一九七一・五）に見える。
46 『文集』巻一五。
47 これらについては、楊小彦・黄専「王時敏与復社」（朶雲編輯部『清初四王画派研究論文集』海書画出版、一九九三・七）、陳伝席「四王散考」（同上）参照。
48 『明史』巻二一八・王錫爵伝。
49 『文集』巻四。
50 注29。順治一〇年三月一九日参照。
51 日本書芸院編『有鄰館名品展図冊』（日本書芸院、一九九二・五）
52 『明末清初』二集所収（同朋舎出版、一九九三・五）。
53 同書七六頁『石渠宝笈続編』養心殿著録。
54 『虹廬潭叢』（『黄賓虹文集・雑著編』所収、上海書画出版）。
55 徐珂『清稗類鈔』巻七一。

〈挿図〉

1 董其昌「馬鞍山色図」　注34より複写
2 李流芳「山水図」　注34より複写
3 邵彌　注35より複写
4 呉偉業「丹青宝筏図」上海博物館蔵　中国古代書画鑑定組編『中国古代書画図目　四』（文物出版社　一九九〇・五）　二三二頁より複写
5 呉偉業「書画」南京博物院蔵　中国古代書画鑑定組編『中国古代書画図目七』（文物出版社　一九八九・六）　一三一頁より複写
6 王鑑　注34より複写
7 董其昌・呉偉業「書画合璧」上海博物館蔵　中国古代書画鑑定組編『中国古代書画図目　三』（文物出版社　一九九〇・五）　二八〇頁より複写
8 王時敏・呉偉業「石菖書画」藤井有鄰館蔵　日本書芸院編『有鄰館名品展図冊』（日本書芸院　一九九二・五）　一七二、一七三頁より複写
9 王鑑「倣趙孟頫茂林蕭寺図」国立故宮博物院蔵　国立故宮博物院編輯委員会編『故宮書画図録　十』（国立故宮博物院　一九九二・九）　七五頁より複写